

カトリック仙台司教区

東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

震災から半年過ぎた9月11日。被災地ではさまざまな祈りの集いが開かれました。ベースが置かれている町々の9月11日の様子をご紹介します。

平賀司教、基本計画、第2期に向けてを発表

「追悼ミサ」仙台カテドラルにて

サポートセンター本部が置かれる、仙台教区のカテドラル元寺小路教会では、9:30からのミサを東日本大震災で亡くなられた方々への追悼の意向で、平賀司教の主司式、サポートセンターから小松、成井、森田神父の共同司式で捧げられた。

ミサの冒頭で平賀司教は「犠牲者(教区内で信徒14名、司祭1名)のために、遺族のために、そして支援者のために祈るように呼びかけた。当日のミサの中で、世界のカリ

タスから視察に来ている方々を成井神父が紹介し、仙台教区への支援が世界規模であることを説明した。ミサに参加した信徒は「震災から半年が過ぎた、いよいよわたしたち元気な信徒が動き出す番です！」と語った。

(カテドラルでの司教ミサ)



4月8日に平賀司教から出された、「新しい創造」基本計画はサポートセンターの活動がひと区切りを向かえる(避難所から仮設住宅へと移行する)9月15日から第2期に入った。それに伴い、同司教は「新しい創造」基本計画、第2期に向けて— を教区内、そして日本の教会に向けて発表し、内容は3月11日以来、被災地で、そして被災地を想う心の満ちたところで起こっている出来事を福音の視点で見つめた現状認識。この第2期は期間を2013年3月末とすること。前出で掲げた2本の柱はそのままに、活動の幅はサポートセンターだけではなく、宮古(札幌教区)、湯本(さいたま教区)さらに長崎管区、大阪管区、東京管区からの支援も含めた日本の教会全体で復興支援に取り組むこと。4→6・45計画も長期の展望で進めること。さらに滞日外国人司牧も新たに重要な柱と位置づけること。などが記されている。

しかしながら、基本計画は、わたしたち一人ひとりの具体的な活動内容には言及することなく、むしろ、わたしたち一人ひとりの自由な発想の下で「神さまのみこころ」を行うことを促している。

釜石では諸宗教の垣根を越えて

米川ベースで炊き出し



釜石ベースが置かれているカトリック釜石教会では、9月11日(日)追悼の祈りとミサのために、午後2時半から集まりました。この集いには、ボランティアとして釜石ベースに来ていた人々も含め、30人が参加しました。釜石の信徒、日本カ

トリック神学院の白浜満神父と神学生、高野山大学宗教教育部に在籍中の4僧侶と、各地から集まった修道女たちもいました。テゼの祈りにより始まり、2時46分、釜石市にサイレンが鳴り響きました。黙禱をささげたのち、高野山大学の若い僧侶・阪田拓也師他3人の僧侶による追悼の読経が行われました。僧侶の方々は、カトリックの人々と共に、聖堂で読経で祈ることができたことに感動し、心が震える思いがしたとのことでした。

3時から舟山亨神父主司式で、追悼のミサが始まりました。聖体拝領のには僧侶の方々も並び、司祭から祝福を受ける姿が、新鮮でした。参加者は、仏教とキリスト教の垣根を越えての祈りに、驚くと同時に感銘を受けた様子でした。神学生たち

も、他の宗教者共に祈ることは、大切なことと感じ、これからはもっと、諸宗教との対話、祈りを大切にしたいと、決意を述べていました。

(上、教会の聖堂の中にお坊さん！)

(下、祈り後に諸宗教でパチリ！)



南三陸町社会福祉協議会から、9月4日(日)の昼食の炊きだしをしてほしいという依頼が、米川ベースにありました。志津川の細浦仮設に入居している人々は、細浦から離れた地区に住んでいた人なので、細浦の人々と交流する場をもちたい、そのための食事をしたいとのことでした。

(米川ベースにて奮闘中)

言うなれば、引越しそばの炊き出しです。急きよ、サポートセンターで「炊きだし支援隊」が結成されました。

しかし、餅米を蒸すためのせいろがない、大体にして、お赤飯を作ったことがない！などのことがあり、結局は「お赤飯」は現地調達。お赤飯のほかに筑前風煮物、焼き魚、おすまし、お漬物、大福餅、お茶という献立に、190食分用意することになりました。突風と豪雨の悪天候の中、たくさんの食材や大鍋などを積み込んで出発。米川についてすぐに、下準備にかかりました。

当日は、朝4時半起床。すぐに筑前風煮物の煮込みに入りました。朝10時、お料理の大鍋6つを積み込んで、仮設集会室へ移動、米川ベースのボランティアも加わって、190人分の盛りつけ。12時、仮設住民と地元の人々の親睦会が始まりました。和気あいあいと交流が続きました。「おいしかった」「きれいですね」「ありがとうございました」口々に言葉をかけてほほ笑まれる被災者の方々と接しながら、この方々が1日も早く新しい土地になじまれ、落ち着いた生活を取り戻されますようにと祈りました。